



《クリスマスメッセージ》

クリスマス 期待を超えて

司祭 マイケル D モイアー



10代の頃、両親は兄弟と私にクリスマスプレゼントに欲しい物のリストを作らせました。それぞれが自分のリストを書きました。クリスマスの朝、プレゼントを開けると、私がもらった物のほとんどはリストに書いていなかった物で、がっかりしました。その失望感が嫌でした。クリスマスを祝う贈り物を通して、両親が私や兄弟たちに注いでくれた愛情に感謝の気持ちを抱きたかったからです。ある年、私は両親に「今年はリストを渡さない」と伝えました。するとその年のクリスマスは、失望に囚われることなく感謝の気持ちを持てたので、とても幸せでした。その贈り物が両親の愛情の証だと心から感じられたからです。

福音書に記されたイエスの物語を読むと、イエスは人々が期待したメシアではなかったことが解ります。ユダがイエスを裏切った理由もここ

にあると推測する者もいます。イエスは政治家ではなく、ローマ政府を打倒する大運動の指導者でもありません。復活後でさえ、弟子たちはイエスに「主よ、今こそイスラエルに王国を回復されるのですか」と問います。(使徒言行録1・6) それでも弟子たちは、イエスが誰であるかを理解していなかったのです。

洗礼によって、私たちはイエスとの関係を始めます。イエスは日々の生活の一部となり、そして私たちは一定の期待を抱きます。その期待は往々にして、他者が語ったイエス像に形作られ、私たちはイエスを厳しい審判者と期待するかもしれません。

私たちは信仰告白の中で、イエスが「再び来られて、生ける者と死んだ者を裁かれる」と告白します。イエスが私たちの望むものをすべて与えてくれる方だと期待するかもしれません。イエスは言わ

れました。「信仰をもって祈り求めるものは、何でも受けるであろう。」(マタイ21・22) イエスは他の人々のために奇跡を行われたので、私たちにも奇跡を行ってくださると期待するかもしれません。

降臨節の間、私たちはイエスの到来に備えています。福音書に記された誕生の物語を思い起こしながら、日々の生活の中で私たちのもとに來れるイエスに備え、また未來に來られるイエスに備えます。しかし、いったいどんなイエスに備えているのでしょうか。私たちの期待とは何でしょうか。私たちの望みとは何でしょうか。私たちはイエスに満たして欲しい「クリスマスリスト」を作っているのでしょうか。

もしイエスが私たちの期待に応えなかったら、私たちは失望するでしょうか。イエスが私たちの人生においてどのような方であるかを知らずに、どうして感謝できるのでしょうか。リストを作らずに、どうしてイエスの到来に備えられるのでしょうか。

私が最も愛するクリスマス

賛美歌の一つは「ベツレヘムの小さな町」です。その5節は、クリスマスが本来持つべき意味を私に語りかけてくれます。

ベツレヘムの聖なる御子よ

我らのもとに降りて来たりたまえ

我らの罪を追い払い

今日我らの中に生まれ給え

我らはクリスマスの天使の声を聞く

大いなる喜びの知らせを告げる

我らのもとに來たりたまえ

我らと共に留まりたまえ

我らの主、インマヌエルよ!

降臨節を、クリスマスにイエスが來られる準備として過ごせますように。そうしてイエスが私たちの中に「新たに生まれ」てくださるように。私たちが期待する姿ではなく、イエスが真に私たちのもとに來られる姿として、イエスを私たちの生活の中に見出せますように。そうすればイエスは、クリスマスだけでなく、私たちの人生の毎日における贈り物となります。イエスという贈り物を、父なる神が私たちに注がれる愛のしるしとして、真に見ることができまますように。

(聖オルバン教会牧師)

ようこそ東京教区へ！

主教 武藤 謙一



広報委員会から「ようこそ東京教区へ！」という内容で原稿を依頼されて、改めて私は東京教区内に住むようになったのだ、と自覚させられました。今年の4月から聖公会神学院校長として働かせていただき、時おり東京教区内の教会で主日礼拝にも出させていただいています。広報委員からの原稿依頼内容に沿って書かせていただきます。

・自己紹介

私は1954年11月清里に生まれました。両親がキープ協会（清里農村センター）の聖路加診療所で働いていましたので、清里聖アンデレ教会の近くにあった職員住宅で生活し、高校卒業まで清里にいました。当時、清里聖アンデレ教会と長坂聖マリヤ教会には中高生が多くいて、毎年、冬休みと春休みには、自分たちで計画した2泊3日の修養会を清里で行い、ガリ版で文集を作っていたことは楽しい思い出の一つです。

聖マーガレット教会の植松功さんもその仲間の一人です。大学生時代は林間聖バルナバ教会でしたが、青年たちが大勢いて、土曜日の夕方から教会に泊まり、日曜日の夕方の礼拝が終わってから帰ったものです。大学を卒業して清里に戻りましたが、しばらくして聖職になりたいと思い、牧師、両親に話し、聖職候補生になりました。大学時代にも聖職になることを全く考えなかったわけではありませんでした。ある日、山梨県の教役者会が長坂で行われており、何の用事でそこに私が行ったのか忘れましたが、会館を訪ねました。その時の甲府、長坂、清里の3人の聖職と一緒にいるその様子が、うまく表現できませんが、私の眼には特別な空間のように映ったのです。その光景を見て、私もその中にいたいと思っただけで、一つのきっかけでした。

聖公会神学院を卒業してからは、千葉復活教会、市川聖マリヤ教会、清水聖ヤコブ教会、銚子諸聖徒教会、小田原聖十字教会、清里聖アンデレ教会、沼津聖ヨハネ教会で働かせてもらいました。どこの教会でも私も家族も本当に楽しく働き、生活させてもらいました。もちろん、今振り

返ると失敗したこと、足りなかったこと、思い出しても恥ずかしく思うこともたくさんあり、信徒の皆さんには迷惑をかけたに違いないのですが、信徒の皆さんや同労者に助けられ、育てられたと実感しています。

2012年7月に行われた九州教区臨時教区会で主教に選出され、12月1日に主教按手、翌年4月から今年3月まで教区主教として12年間働かせていただきました。自分のような者が主教に選出されるとは思っていませんでしたので、畏れと不安で一杯でした。しかもそれまで縁のなかった九州教区で働くことになったのですから、神様のなさることは人の想いを超えています。九州の各地を自動車で移動しながら、「私たちが九州にいるなんて本当に不思議だね」と妻とよく話したものです。九州教区でも2016年の九州地震、教区婦人会解散など様々なことがあり、また司祭の時以上に会議や出張も多くなり、時間に追われるような日々でしたが、教区内の教会を巡杖し、信徒の皆さんと聖餐式を献げ、交わることで力をいただいていたように思います。信徒、教役者の皆さんの祈りと協力に支えられた12年間でした。

・聖公会神学院のこと

聖公会神学院に来て半年が経ちましたが、恵まれた環境のなかで学生、教職員と共に過ごす毎日を本当にありがたいことと感じています。私が入学したのは1978年ですが、聖公会神学院が大切にしている礼拝と学びと共同生活は、今も変わることなく大切なものとして守られています。礼拝に関しては、学生たちは30分前にはチャペルで準備し沈黙のときを守っており、わたしが学生だったときよりも真面目ですし、学習に関しても同じように感じます。共同生活に関しては、学生間の多様な関係のなかでの葛藤、衝突、関係回復などを通しての自己理解や他者理解を深めるという点では、学生数が少ないことは残念に思います。

また教育面では、「神の宣教」に責任をもって共に仕える主体となること、また多様なミニストリーの現場で、人々や出来事との出会いを通して体験的な学びである実習が大切にされており、更に現在は日曜日の教会実習も行われており、学生たちは決められた教会で聖職や信徒との交わりを通して多くの気づきを与えられています。

聖職者の不足は日本聖公会全体の

課題の一つです。一人の聖職は複数の教会を担当するのが当たりまえのようになり、関連施設の働きに加えて教区や管区の役割も担い、誰もが多忙になっています。信徒の皆さんの協力と働きがなければ宣教・牧会の働きを十分に果たすことが出来にくくなっています。コロナ禍以降、聖公会神学院では、オンラインによる「特任聖職特別コース」と「信徒の奉仕召命コース」を開講しています。ただ単にキリスト教や聖書について学びたいということではなく、教会の奉仕者として働く信徒を対象とした講座です。今年度は13名の方々が学んでおられます。また現役聖職の学びも聖公会神学院の働きの一つであり、校友会の協力を得ながら実施されています。昨年から「説教セミナー」、非暴力対話研修、研究発表会などが行われています。ご自分の教会の聖職が参加できるように信徒の皆さんからお勧めし、また協力くださることを願っています。

日本福音ルーテル教会と日本聖公会は2001年に「協働に向けた提案」がなされ、翌年の日本聖公会総会で承認されています。そのことを踏まえて聖公会神学院はルーテル神学校と毎年7月に交流会を行い、今

年は19回目となりました。さらに来年度は「エキュメニズム」の授業を共同講座として、両神学校の学生が同じ授業を受け、互いに学ぶことを計画しています。昨年度は神学生がフィリピンの聖アンデレ神学校で過ごすことができましたが、今後もうイリアムス神学院や大韓聖公会の神学校などアジアの神学校との交流も実現できたらと願っています。

今年10月にはオープン・カレッジを開催し、公開授業、校内ツアー、礼拝を参加者の皆さんとご一緒しました。今後も皆さんに聖公会神学院を知っていただき、支援していただける機会を設けたいと思っています。これから聖公会神学院のためにお祈りとお支えをお願いいたします。

・説教について

聖公会神学院で説教を教えてくださったのは関田寛雄先生でした。関田先生がよく言われたことは「テキストとコンテキスト」ということです。聖書のみ言葉(テキスト)と何時、どこで、誰に(コンテキスト)それが語られるか、ということですが、それが語られるか、ということでも、同じ聖書の箇所であっても、何時、どこで、誰に対して語られるかで、

その内容も変わってきます。ですから、わたしは、聞き手が誰であるかは、いつも気にしています。礼拝と宣教・牧会がつながっているように、説教もまた牧会とつながっていると、いうことです。牧師時代には、信徒の方々の状況が理解できていました。が、主教になったばかりのときには、巡視する教会の信徒の皆さんのことがよくわからずに説教をしなければならず、戸惑いを感じましたが、次第に、各教会の皆さんのこと分かるようになって、その不安もなくなってきました。4月以降、時々東京教区の教会から主日礼拝の司式・説教を頼まれることがあります。その教会の様子、信徒の皆さんのことが分からないまま説教することに不安を感じています。今年の7月に聖公会神学院で行った説教セミナーに参加して、説教準備がいかに不十分だったかを改めて反省させられました。今は九州教区にいた時と比べると準備のため時間が取れることはありますが、いろいろですが、説教が良くなっているかどうかは…。

・クリスマスを迎えて

今年もまもなく終わろうとしています。今年を振り返ってみて今年

も世界の各地で戦争・紛争が終わることはありませんでした。殊にパレスチナ、ガザ地区では建物の80パーセント以上が破壊され、見渡す限り瓦礫の山とことです。6万2千人以上の尊い命が犠牲となり、その中には子供たちも多く含まれています。あたかも力が正義というような状況が続いており、不寛容と分断が強まり、憎しみの連鎖が断たれることがありません。それはいじめや青少年の自殺件数が過去最大だということ日本においても同じようなことが言えるのではないのでしょうか。

主イエスのご降誕を祝うとき、命の危険にさらされ、生きることが困難な人たちが、生きる希望を見出すことができますように。主の平和が実現しますように。そして、私たち一人ひとりが人々に愛と喜びをもたらす平和の器として用いられますようにと祈らずにおられません。

「闇の中を歩んでいた民は大いなる光を見た。」

死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が輝いた。」(イザヤ9章1節)

主イエス・キリストのご降誕を心からお慶び申し上げます。

(聖公会神学院校長)

聖マーガレット教会のユース・プログラム

司祭 塚田 重太郎 学生や高校生でも来られるように考えたからです。

聖マーガレット教会のユース・プログラムは、2018年1月から、ユース聖餐式として始まりました。

私はスコットランドから帰ってくる直前に、イングランド聖公会が教会の成長と衰退について行った調査結果 (From Anecdote to Evidence: Findings from the Church Growth Research Programme 2011-2013) を見つけて、目を通しました。そこには、

20代まで教会生活を続けた者はその後も教会生活を続けるけれども、20歳までに教会を離れた人はほとんど戻って来ないと書かれていました。

2017年に聖マーガレット教会の牧師になった当初から、私は、教会の中に10代から20代の若者たちのための居場所を作り、イエス様が託された神の国の民として育てることが、消滅の危機に瀕する教会が生き残るために、絶対不可欠なことだと考えていました。

毎月第2・第4・第5日曜日に、行うユース聖餐式の開始時間を、午後5時という遅い時間に設定し

たのには、部活のある中

新たに訳出した式文（教区主教承認済み）を使い、ギターとピアノに合わせて歌い、大きなパンを割いて食べ、美味しいぶどうジュースを飲むユース聖餐式は、新しい人にも親しみやすい礼拝となったと思います。

また、ユース聖餐式では、信仰を日々の生活に結びつけるための、小グループに分かれて共に語り合う時間と、互いのために祈り合う時間を大切にしてきました。

当初、ユース聖餐式の参加者は中学生から大学生までの10人から15人くらいで、信徒の子どもたちが中心でしたが、次第に、他教会、他教団、さらに国も越えて、若者たちが参加してくれるようになりました。

コロナ禍の前には、毎回、20人から25人の参加者が集うプログラムに成長したユース聖餐式ですが、開始から約6年後の2024年の



春、これを閉じることを決断しました。

6年間に渡ってユース聖餐式を行なってきた中で、大きな課題が明らかになりました。それは、洗礼を受けてはいないけれども、ユースの核として活動しているメン

バーが、陪餐のたびに疎外されるということでした。

ユース聖餐式が終わるたびに、「このままでは、若い世代への宣教と育成を目的としたユース礼拝のあり方として、相応しくないのではないか」と思うようになり、祈りながら新たな道を模索しました。

こうして2024年の5月12日の日曜日から、ユース聖餐式は、アガペー・ミールに道を譲ることになったのです。

ユース聖餐式とアガペー・ミールとの間には、大きな違いがいくつかあります。まず、ユース聖餐式をアガペー・ミールに置き換えるという決断に導いた最大の要因は、アガペー・ミールであれば洗

礼を受けているか受けていないかに関わりなく、参加者全員が、一緒に食することができるという点でした。

そして、もう一つの大きな違いは、聖餐式であれば司式は司祭しかできませんが、アガペー・ミールであれば、参加者の誰でもリードすることができるということです。

最後に触れておかねばならないことですが、ユースのプログラムは、ユース世代だけではできません。ユース世代は変化が早く、現在のメンバーが、3年後にもいるとは限りません。

聖マーガレット教会のアガペー・ミールを支えてくれているのは、若い人たちの居場所を作り、育てることが、教会の大切なミッションだと信じて、食事の準備をし、若者たちを迎えるために、毎回そこにいてくれる、忠実なシニアのサポーターたちなのです。

アガペー・ミールは、洗礼を受けている人も、洗礼を受けていない人も、共に食卓を囲み、罪人との食事の中に神の国を見たイエス様に出会う、そんな礼拝です。

ぜひ聖マーガレット教会のアガペー・ミールに、参加してみてください。

【CCEA アジア青年大会】

交わりが形作る信仰

卓由真

CCEA アジア青年大会では、各国の青年と信仰や生活について語り合い、アングリカン・コミュニケーションのつながりと、それぞれの置かれた環境の違いを強く実感した。特に、軍事クーデター後の不安定な状況にあるミャンマーの青年から、教会に通うことさえ命の危険を伴う現実を聞き、信仰の自由が当然ではないこと、自身の日々の生活における視野の狭さを痛感した。

また、フィリピンの青年たちとの交わりを通して、複数の教派の中で自らの信仰の在り方を模索し、聖公会の仲間との出会いを通して自分の居場所を見いだした経験を分かち合った。私自身も「なぜ教会にいるのか」と問い続けた時期があり、自身の信仰に対する問いが、国は違えど他国の青年と共有できる悩みであることに安心を覚えた。青年よって芽生え方も形も異なる

ことを学んだ。だからこそ、歩みを急がせるのではなく、互いの背景や痛み、喜びに目を向けつつ、共に考え合う姿勢が必要だと改めて感じた。このような他国の青年との交わりを経て、より自身の信仰について問う機会になった。



CCEA では、他国の聖公会の現況について学び、同じ共同体としての意識を持てたことで、教区や日本聖公会の在り方についてより考えるきっかけになった。私たちの信仰活動の中では神様と自身の間を意識することも重要だが、教会・教区・管区を支える共同体として、より

横のつながりを大切にしていくべきである。特に、青年が少なくなっている教会がある現状や青年期におけるクリスチャンとしての自身とそうでない周りの青年と姿の乖離によって、教会に行くことや純粋に信仰を持つことに困難さを感じる青年も多いだろう。そのような時にこそ「一人ではない」と実感できる、教区内の青年同志の交わりを持てるような場所をつくっていききたい。そのような感じてもらえるためには、一度の大きな経験ではなく、継続した活動による土台づくりが必要である。なぜなら、自身の信仰というのは、私が今回の CCEA アジア青年大会で経験したように、様々な人との交わりから醸成されていくからである。この度は貴重な経験をありがとうございました。今回の様々な青年との出会いを忘れずに、教会のみならず教区での活動でも、青年たちと神様とともに歩んでいきたいと思っています。

【司祭の1冊】

異議申し立てとしての宗教

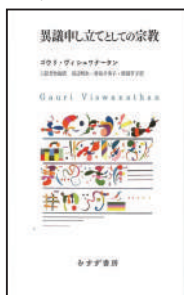
ゴウリ・ヴィシユワナータン著

みずす書房刊

執事 福永 澄

今回ご紹介するのは、宗教学やポストコロナリアル研究の分野に属し、宗教を社会変革の視点からとらえ直すものです。

ゴウリ・ヴィシユワナータン著『異議申し立てとしての宗教』は、宗教を「ただ信じるもの」や「古い伝統」としてではなく、社会に対して声をあげる力として描き出した本です。多くの人は



宗教を個人の信仰や儀式に限定して理解しがちです。しかし、著者は歴史をたどりながら、宗教が社会の中でどのように役割を果たしてきたかを丁寧に示します。それは、不正や差別に立ち向かうための「異議申し立て」としての宗教です。

植民地時代のインドでは、宗教は支配者に利用されただけでなく、人々が希望をつなぎ、自由を求めるための拠り所にもなりました。信仰を通

して人々は励まされ、教育や文化活動を広げながら社会改革へとつながっていったのです。宗教は慰めにとどまらず、人を立ち上げさせる実践的な力や希望となったのだと著者は語ります。

現代でも宗教は「争いの火種」と見られることがあります。しかし、同時に災害時の支援や人権運動、多文化共生の現場で大きな役割を果たしています。日本でも東日本大

震災以降、多くの宗教者や宗教団体が避難所での心のケアや物資の支援に携わり、被災者を励ましました。

宗教は時に衝突を生み出しますが、同じくらい、人を結びつけ、助け合いを生み出す場にもなっているのです。

ヴィシユワナータンの議論は、宗教を危険視するだけでは見えないもう一つの側面を示し、社会を変える可能性を秘めた営みとして理解し直す視点を与えてくれます。本書は、宗教と社会の関わりを新しい目で考えてみたい人にとつて、大きな勇気と示唆を与えてくれるでしょう。

教会談話室

三光教会

大久保 郁子

北関東教区と一緒にになると話が出てくる今、お互いのメリットや展望があまり見えず、先のみえない霞の中にいる気がします。聖職者の減少が根底にあり一緒になるしかないという現状ありきのこの話し、今更ですがもうどうすることも出来ないという気持ちを踏まえ、次回からはもう少し早めに信徒を巻込みながら進めていくのはいかがでしょうか。

真光教会

松田 正人

クリスマスは楽しい、子どものころから老境に入った今日まで、サンタもツリーもパジェントもプレゼント交換も、キャロルも、靴下も、チキンの丸焼きも。

非業の結末を知っている私たちなのに、ワクワクするこの気持ち、この喜びを世界と共有するには停戦が、終戦が、豊かな食事がもたらされなければ。それは私たち人間の果たすべきミッション。

東京聖マリア教会

東京聖マリア教会では、2025年7月から礼拝後のプログラムとして、第1主日に聖書輪読、第2主日

に聖歌の練習をしています。聖書輪読はルツ記を読み終わり、今はヨブ記を読んでいます。聖歌の練習は、馴染みがない曲、歌う機会が少ない曲、個人の愛唱聖歌などを練習しています。どなたでも参加可能ですので、ご興味がある方は是非ご連絡下さい。

大森聖アグネス教会

田 治哉

人生は実に犠牲の連続である。何かを成し遂げるためには、いくつもの自由と快楽を捧げねばならない。畢竟何かを選ぶということは何かを選ばないことなのだから。そしてそれは人生に限った話でもない。

あと何年クリスマスが祝えるだろう。少なくとも10年後には「いつも通り」とはいかない。何を残して何を捨てるのか、考え始めるのに早いということはないはずだ。

聖パウロ教会

阿部 基裕

来年の創立150周年に向けたミッション探求『信徒懇談会』は7回を終えた。『教会への希望（夢）』を語り合い、当教会百年史から先人の働きを学び、信仰生活で大切にしていることや記念事業アイデアを出し合う。現在『主イエスの弟子になること（「知る」「交わる」「仕える」）』を軸に、プログラム企画・実行チー

ム立上げへと進んでいる。

目白聖公会

鈴木 ゆう子

目白聖公会では、コロナ禍もあり中断していた学習支援のシブリアン塾を、豊島区の子供支援NPOと立教大学生ボランティアの協力をいただいて、6月に再開しました。今は月1回の開講ですが、地域の小中学生を対象に自由に学び自由に遊ぶ子供たちの居場所になることを目指しています。地域の教会の小さな働きに、主のお導きがありますよう祈りつつ。

東京諸聖徒教会

毎年、降臨節第1主日の午後、教会の玄関に大きなクリスマスツリーが飾られます。そして夕方からはライトが付き、教会の入り口を飾ります。通りから少し入った所にある諸聖徒教会はこの時期ご近所の方々もこのツリーを楽しむにしてください。これからの4週間、主のご降誕を待つ、大切な時をツリーと共に過ごします。

東京聖テモテ教会

島田 明夫

東京聖テモテ教会では、花壇の一部を畑にして、作物を栽培しております。夏野菜として、トマト、キュウリ、ナスを育てましたが、7月までは順調に育って収穫できたのです

が、その後は酷暑で立ち枯れてしまいました。その後、白菜、ソラマメ、ブロッコリを栽培しております。白菜は順調に育っていたのですが、毛虫に丸裸にされてしまいました。

神田キリスト教会

八代 誠

夏の教会キャンプは猛暑のため中止し、代わりに下町グループの教会にもお声掛けして8月31日に納涼会を開催しました。10月5日には創立148年記念礼拝を行い、祝会の席では当教会の歴史の講演がありました。10月26日にはバザーを開催、収益は浅草聖ヨハネ教会日曜給食活動、ガザ・ウクライナ・ミャンマーの人々のために献げします。

月島聖公会

聖公会神学院3年の川島創士神学生が、夏休みを挟んで約半年間、実習に来られました。最初は朝のフリースペースにやって来る元気いっぱいの子どもたちに押され気味だった川島さんも、11月にはすっかり馴染んで、子どもたちの心をつかむ素敵なお話をしてくださいました。柔らかなで明るいお人柄の川島神学生の今後のご活躍をお祈りしています。

浅草聖ヨハネ教会

10月26日、2回目のオープンチャーチ&ミニマルシェが開催されました。

ぶ電飾、そして中央の花壇には電飾のツリーを設置、聖夜を美しく彩った。以来 30 余年、壁画とツリーは設置しなくなつて久しいが、電飾は短くなつたとはいえ、今なお人々を聖堂に誘い続けている。

八王子復活教会

今年の降誕日の礼拝では、聖公会八王子幼稚園卒園児保護者の音楽グループ『ブルーミンシスターズ』と信徒有志が、コベントリーキャロル（聖歌 105 番）を奉唱する企画をしました。教会と幼稚園が、共に歩むことを願い、声を重ね合わせ、クリスマスを迎えることができることに、期待でワクワクしています。よき交わりのひと時となりますよう。

聖パトリック教会

松本 利勝

クリスマスには毎年、教会にサンタがやってきました。クリスマス祝会の最後に必ずプレゼントを持って。

子供たちは大盛り上がり。幼い子供たちは心からサンタを信じていますから瞳がキラキラです。実は一番嬉しいのは大人たちです。幼子たちのサンタを見上げるその愛らしい姿にイエス様、そして幼かった自分自身の姿を見ているからでしょう。

聖マルコ教会

清水 典子

今年は教会のなつめが大豊作。10

月の日曜日、なつめ収穫隊出動！通りがかった家族連れが、「何の実ですか？」と興味津々。小さいお子さんの手に実を乗つけてあげました。「毎日ここを通るのでスマホで撮っていたんですよ」と年配の男性が、実が赤く色づいたなつめの木の画像を自慢げに見せてくれました。宣教の窓口は思いがけない所で開くのでは。

小金井聖公会

アドヴェントの期節を待ち続けて、待ち続けて、いよいよクリスマスが到来する。しかし、ややもすればクリスマスには、3 つの誘惑が待ち構えているかも知れない。イヴェンタ化、ブランド化、マイホーム化の誘惑。クリスマスを風物詩的に捉え、季節



商売の付加価値に利用し、仲間うちの悦楽で満足する。飼葉桶の幼子イエスは、その誘惑を退ける。



次回 イースター号

2026 年 4 月 5 日発行予定

東京タワーの麓

織りなされる祈りに加えられて

今夏の想像を絶する暑さの中「小まめな水分補給」という言葉を何度も耳目にしました。その中、冷たい一杯の水、それも掌ですくい上げて口にする湧き水には息を吹き返してくれるような力、心や魂までもが潤される力を感じます。その自然の湧き水は、チョロチョロと湧き出ている小さな泉に始まります。

改めて聖書の話を読み、授けられているいのちを思う時、いのちの源なる神様に会います。そのいのちの恵みの源なる方に向かい、イエス様は「アッパ、父よ」と呼び掛けられました。当初、多くの人たちは、神様に向かって幼子のような気持ちで全幅の信頼と親しみを込めて「アッパ」と呼び掛けることが出来る人など、在ってはならないとさえ思っていたことでしょう。

深い信頼を持って、神様に向かって「アッパ」と呼び掛けているイエスという方がいらっしゃる、それを目の当たりにした弟子たちも驚くことしかできなかったことでしょう。しかし、そういうイエス様と神様との交わりの中に、弟子たちは、このイエス様こそ神様から湧き出されるいのちの水で在られるということに気付かされていきます。そして、いのちの水なるイエス様に触れることが、その源で在られる神様に触れることに通じるのだということも分かり始めていきます。

更にその折、もう一つ深く感じ取ったことは、祈りとは父なる神様と子なるイエス様とが織りなす調べであり、その調べに自分たちの捧げる願いや祈り、生きることそのものが重ね合わされているということにも気付かされていきました。

キリストの教会は、祈りの最後に「イエス様の御名によって」という言葉を付け加えてきました。それは、私たちの捧げる祈りが、神様とイエス様とが織りなされる調べに重ね合わされますようにという願いと助けを表します。私たちは一人きりで祈っているのではなく、常に私たちと一緒に祈ってくださるイエスという方がおられるという信仰を授かっています。

「求めなさい、そうすれば与えられる」とのイエス様の教えは、欲しいと言えば神様は何でもこちらの意の儘にくださるということではありません。イエス様が言われたことは、私たちの捧げる祈り、願いを支え助け、聖なるものとしてくださるという信仰を伝えてくださっています。

(主教 フランシスコ・ザビエル 高橋 宏幸)